

栄西呼称の変遷と禅宗の変質

斎藤 夏来 ・ 谷 鋪 昌吾*

栄西は一般に臨済宗の開祖とされるが、顕密仏教全体の再興を志した実像とは隔たりがある。そこで栄西認識を示す史料の網羅的な収集を試みた結果、中世顕密仏教につらなる「葉上僧正」という呼称に対抗すべく「千光国師」という呼称が近世に台頭した様相が明らかとなった。国内仏教の一宗派へと転身した近世禅宗の周辺で、栄西の国際的な呼称であった「千光」と、天皇帰依僧への尊称であった「国師」とを組み合わせる動きがあったと想定した。

Keywords : 葉上僧正、千光国師、栄西禅師、五山派、高峰東暎、近世地誌

はじめに

栄西といえば、顕密体制論や、それと前後して進展した思想史研究の成果により、仏教の禅律という実践的な側面、とりわけ海外仏教の戒律重視に学び、顕密仏教全体の立て直しを志した顕密僧の一人だという評価が定着しつつある⁽¹⁾。栄西が主著『興禅護国論』で主題としたのは戒律だが、こうした栄西の素志は必ずしも順調に継承されたわけではなく、たとえば、同書が五山版として流布されることはなく⁽²⁾、並行して律宗も衰退に向かったのだとすれば、栄西のちに続く禅宗ないし臨済宗の開祖といえるのか、再考せねばならない。現在にいたる有力宗派は、法然、親鸞、道元、日蓮、一遍らの「祖師絵伝」を整えたとされるが、栄西については類例を検出しがたいことも想起しておきたい⁽³⁾。

しかしそれでも、禅宗内外の史料で、栄西が禅宗の重要な祖師の一人として、傑出した存在感を示していることも確かである。このように、「開祖」というほどではないにしても、「祖師の一人」としての栄西の存在感を、過不足なく把握しなおすこと、これが本稿での作業の目標である。

論考末尾の表1は、『大日本史料』『五山文学新集』を中心に、その他先行研究で示されているものも若干追加して、栄西という存在に触れている史料を収集した結果である。さらに参照すべき公刊、未刊の諸史料が多く存在すると承知しているが、たとえば『大日本史料』は栄西にかかわる記事について、近世

の地誌類にいたるまでかなり幅広く収集しており、今後の補正の基礎にもなるような傾向や論点はつかめると考える。

収集できた史料については、その素性に応じ分類し、記号を付した。

I 著述類 (①道元、②中世、③近世)

II 聖教類 (①血脈図、②その他)

III 文書記録類 (①廷臣顕密系、②禅宗系)

* 岡山大学大学院教育学研究科 社会・言語教育学系 七〇〇一八五三〇 岡山市北区津島中三一一一

岡山県立笠岡工業高等学校 七一四一〇〇四三 岡山県笠岡市横島八〇八
Change in quality of the Zen Buddhism with the recognition of Eisai

Natsuki SAITO

Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

Shogo TANISIKI

Kasaoka Technical High School in Okayama Prefecture, 808 Yokoshima, Kasaoka city 714-0043

IV 宋元明人の文筆類

V 禅僧語録類（入寺疏、入院・住院法語、贊、寄文送行次韻〈私的交流に関わる作品〉、記銘叙題〈公式的な作品〉、勸縁疏、仏事法語、字説の種類を参考表示した）

VI 編纂物（①伝記、②地誌、③禅宗関連、④通史年代記、⑤他宗関連、⑥系図、⑦軍記説話、⑧その他）

史料は上記の分類ごとに年代順に配列した。また、収集史料にみえる栄西に対する呼称・尊称のうち、代表的な葉上、僧正、千光、明庵、禅師、国師の六種について、その有無を○印で示した。なお、栄西に関する記述が頻出する『延宝伝灯録』『本朝高僧伝』『扶桑禅林僧宝伝』『禅林僧伝』や『扶桑五山記』『鎌倉五山記』（以上、順不同）など、江戸期成立の僧伝や禅刹記類は、基本的に他の史料で検出できる傾向をそのまま受容しているため、煩雑をさけて検討対象から除外した。また、道元の語録についてはVではなくIに分類し道元の著述として一括した。刊行史料の掲載頁は原則として冒頭の頁数を提示したが、長大な史料については該当頁数で表示した場合がある。

以下、後世の栄西認識の出発点になったとみられるI～IVの史料群ごとに、栄西呼称の特徴を確認し、さらに、栄西の呼称群ごとにその持つ意味を考察し、呼称の傾向から読み取れる栄西認識の変遷を小括し、発展継承的にはつながらない禅宗の変質を展望する。

昌吾 谷舗 夏来 斎藤

一 栄西認識を示す史料群の傾向

I①道元の著述類 道元は栄西の孫弟子にあたる人物で、栄西の多面的な性格や活動に対応して、多様な呼称と尊称とを用いているが、「国師」の尊称のみ確認していない。

I②道元以外の中世著述類 天台系の慈円(6)、浄土宗鎮西派の祖・良忠(8)、禅宗系統の無住(7、9)、虎関(10、12)、夢窓(11)など、著名な人物の著述類だが、彼らは先に述べた代表的な六種の呼称や尊称をあまり用いていない。栄西といえは「建仁寺の本願」「建仁寺の開山」というのが彼らの基本的な認識であった。

I③近世の著述類 美濃・尾張地域の瀬戸焼関連など、単に「栄西」と記す事例(13、16)のほか、「千光国師」(14)「千光禅師」(15)の用例がある。

II 顕密仏教系の聖教類 「葉上僧正」という呼称の出発点と目される。「葉上」の語源については、後鳥羽天皇のために祈祷した法験とのかかわりが「興禅護

国論 序」(209)で論じられているが、初見はそれ以前の皇慶撰『金剛界大灌頂随要私記』(23)で、栄西の房号とも考えられている。「葉上」のその後の用例については、VIに分類した編纂物一般にまで視野をひろげてみると、たとえば間宮士信等著『新編相模国風土記稿』(204)など、江戸後期までに使用されている。「葉上流灌室」を備えていたことで知られる愛知県春日井市の現天台宗密蔵院(43)の事例もあり、栄西といえは禅僧だという認識は江戸後期段階でなお一般化していなかった様相を示す。血脈図類では、単に「栄西」と記すものが多い。

III① 廷臣周辺の文書記録類 仲資王(47)、業資王(48)、藤原定家(49、50)、一条経嗣(57)などの廷臣や、廷臣層出身でII聖教類の作成などを担った顕密寺社周辺の文書記録類である。「葉上」に付する尊称としては、「僧正」のほか「聖人」(47)「上人」(48)「法印」(49)などあるが、「禅師」の尊称は確認していない。なお、「建仁寺本願僧正之素意」は禅教律の三字興隆にあつたと述べた鎌倉幕府の公的見解(53)も、廷臣層に連なるものとして、ここに分類した。VI⑧に分類した和歌・有職故実類(242～244)を含め、廷臣・顕密寺社周辺では「千光」の用例がみられないことに注意したい。

III② 禅宗周辺の文書記録類 義堂周信(59、60、61)、太極(62)、季弘大叔(63)、耳峰玄熊(64)、西笑承兌ないし有節瑞保(65)などの禅僧たちの用例で、廷臣・顕密寺社周辺にはみられない「千光」が散見する。このなかにあつて、曹洞宗系の「正治元年十一月八日付明全戒牒追記」(66)は「栄西僧正」の呼称を用いており、廷臣・顕密寺社に近い性格を示す。また、「附宮辻子地于靈洞庵文」(58)は、叡山の三塔集會事書を引用する体裁で、そのなかに「千光禅師」の用例があるが、廷臣・顕密寺社周辺での「千光」の用例は異例であり、別途検討を期する⁴⁾。

IV 宋元明人の文筆類 「千光」という呼称の出発点と目される。「千光」の語源については、『今昔物語集』にみえる叡山の院名に由来する、と指摘されている⁵⁾。国内的にさほど著名とはいえない叡山千光院が、なぜ栄西の代表的な呼称の由来になったのか。その理由はおそらく、栄西が『興禅護国論』で記すところによれば、虚庵懷敏が帰国する栄西に印可状を与えるに際し、「日本国千光院大法師」と呼びかけたことによる⁶⁾。おそらく栄西自身が、虚庵らに対し自分の所属を叡山の千光院と述べていたのであるろうが、虚庵の印可状をひきついで宋元明人の文筆類で、「千光」はいわば栄西の国際的⁷⁾な呼称として定着し、I①道元、禅宗系のIII②諸記録やV禅宗語録類、I③やVIに分類した

近世の著述類に受け継がれたのであろう。他方、廷臣・顕密寺社周辺（ⅡⅢ①の史料群）は、かなり意識的に、栄西の国際的な呼称というべき「千光」の使用を避けていたように見受けられる。

ここで、史料群別の検討を離れて、呼称群別の検討へと移ろう。

二 栄西認識を示す呼称群の傾向

表2にまとめたとおり、栄西の個人的な呼称としてはA 栄西、B 葉上、C 明庵、D 千光の四種が多く用いられ、これらと組み合わせ用いられる尊称としては、a 僧正、b 禅師、c 国師の三種が基本である。このうちb 禅師は、「本朝禅師之号始于隆」とされる蘭溪道隆の「大覚禅師」の系譜をひくものではなく、実践により験力を現す人々という「禅師」の原義⁹⁾に由来するであろう。「遁世の身ながら、僧正になり給ひける」¹⁰⁾といわれるように、栄西は、正規の顕密僧から離脱して禅律など実践面を重視した遁世僧だと認識された場合、一般には「僧正」ではなく「禅師」の尊称こそふさわしかったと考えられる。これに対しc「国師」も、「禅師」と同じく語源について検討を要するが、基本的には円爾に与えられた聖一国師号を濫觴¹¹⁾とし、顕密系以外の禅・律・念仏系の僧侶と天皇とを結びつける機能を果たした天皇帰依僧としての尊称とみてよいだろう¹²⁾。

この表から分かることとして、密教的なB「葉上」とb「禅師」c「国師」とは混用されないことが確認できる。また、禅宗的なC「明庵」、D「千光」と、a「僧正」とは混用しないという原則も確認できる。以下、用例の多いA a 栄西僧正、A b 栄西禅師、B a 葉上僧正、D b 千光禅師、D c 千光国師の呼称群を中心に検討を加えよう。

A a 栄西僧正 この呼称は八点の史料（26、50、54、55、66、180、215、221）で確認できるが、中世史料を引用する高峰東峻撰『靈松一枝』（215）をのぞき、年紀が判明するものは中世史料である。したがって、たとえば「正治元年十一月八日付明全戒牒追記」（66）など「栄西僧正」という記載のある史料は、追記部分についても中世史料である可能性が高い、と考えられる。

A b 栄西禅師 江戸時代の儒学者伊藤東涯（一六七〇～一七三六）が「栄西禅師帰朝図」と名付けた常盤山文庫所蔵「送海東上人帰国図」（67）¹³⁾を除く九点

表2 栄西呼称・尊称の組み合わせ

	a 僧正	b 禅師	c 国師
A 栄西	8	10	1
B 葉上	27	0	0
C 明庵	0	1	0
D 千光	0	14	19

（21、78、192、197、202、205、213、233、234）のうち、年代が判明するものは近世史料である。したがって、たとえば年紀未詳だが、「贈日本客僧栄西禅師 明昌元侍郎周宏」（78）など「栄西禅師」という記載のある史料もまた、近世史料である可能性が高いと考えられる。「禅師」といえば、正規の顕密僧からは一段劣った遁世僧の尊称だという感覚が、近世には薄らいだことによるであろうか。なお上記史料は、おそらく明代の史料だが、明人であれば栄西の国際的な呼称である「千光」を用いるべきところ、これを避けているのは、依頼主¹⁴⁾所蔵者が鶴岡八幡宮、すなわち顕密寺社であったためとも考えられよう。

A c 栄西国師 敬光述・仏猊補『山家学則』（37）のみ「栄西国師」と記している。この事例以外、「国師」の用例はすべて、後述の「千光国師」である。天皇が遁世僧とりわけ禅宗系僧侶に与えてきた「国師」の尊称は許容しても、「千光」の呼称はあくまでも回避するという廷臣・顕密寺社周辺の根強い観念を示しているとも考えられる。

B a 葉上僧正 先述のとおり、廷臣・顕密寺社周辺（ⅡⅢ①）に由来する栄西認識の代表的な呼称である。ここで確認しておきたいのは、第一に、禅宗系の史料で「葉上僧正」の呼称を用いる事例が散見する（87、88、165、170、210）、という事実である。廷臣・顕密寺社周辺は「千光」を忌避したが、禅宗周辺は「葉上」を忌避しなかったとみられる。第二に、近世地誌類をみると、根強い「葉上僧正」の用例がみられる（197、200）が、いずれも「千光」と併用されており、「千光」単独の用例の方がむしろ主流である（193、196、198、202、203）。すなわち、顕密仏教こそ中世宗教の中核であり、禅宗はその部分的な存在だという通念に反し、少なくとも中世後期から近世にかけては、禅宗系の方が包括的であり、なおかつ、中央支配者集団に連なる「葉上」よりも、国際性を有する「千光」の方が地方社会へ浸透していた様相に注意したい。

D b 千光禅師 収集できた十四点中十二点は中世史料で、道元（2、3、4）や宋元明人の著述（70、73、75）に特徴的な呼称といえる。ただし中世五山派が「千光」に付した尊称をみると、

- 「祖（師）」：64、82、83、90、96、97、103、112、113、114、122、123、125、126、131、133、135、138、141、143、146、150、164、173、174、177、178
- 「大士」：119、134、145、148、149、154、155、168
- 「古仏」：106、124、127、129、140、149、160
- 「禅師」：99、101、102、115、151
- 「法師」：93、98、104、121

「(大)和尚」: 79、80、108、159

など多様である。五山派が宋元の禅宗高僧と同様に、栄西を「禅師」と呼ぶ事例もないではないが、日本では顕密僧よりも一段劣った存在である遁世僧とみなされる可能性もあったためか、必ずしも主流の用法ではない。そのなかにあって、仮にⅢ②に分類し禅宗系史料とみた「附宮辻子地于靈洞庵文」(58)には、先述のとおり「千光禅師」の用例があり、五山派と顕密寺社との関係を考える手がかりとなる⁽¹⁴⁾。近世以後も、『甲子夜話』(15)や『本朝禅林宗派并五山十刹』(211)⁽¹⁵⁾に「千光禅師」の用例がみえるが、近世以後の栄西呼称の主流は、明らかに「千光国師」へと移行している。

DC千光国師 先にみたとおり、I①道元は、栄西については様々な呼称を用いているが、収集の範囲では「千光」は用いているが「国師」は用いていない。「国師」の初見は、収集の範囲では十五世紀半ばの『桃隠集』(144)や『武家年代記』(222)である。

昌吾 谷舖 夏来 藤齋

このうち『武家年代記』には「勅諭千光国師」とあり、『石城志』(197)にも「千光国師」と諡す」とみえる。「国師」という称号は、もともと中国・朝鮮など海外に由来した可能性もあるが、顕密八宗の枠外にあった禅・律・念仏系の遁世僧と天皇とを結びつける尊称として定着したという⁽¹⁶⁾。つまり、顕密系以外の僧侶と天皇とを結びつけるという国内的な事情に基づき機能していた「国師」号と、国際的な呼称としての性格を維持していた「千光」との組み合わせだが、朝廷がこれを公式に認めた形跡は、今のところ確認できていない。

一方「桃隠集」であるが、これは妙心寺派禅僧の作品であり、大徳寺派の作品(101、102)とともに、五山派とは一線を画した「林下」の作品とみなすべきだという意見があるかもしれない。しかし私見では、両寺住持とも「南禅寺並」の寺格を主張して紫衣を着用しており、その点では南禅寺住持を頂点とした五山派の一員と解し得るし⁽¹⁷⁾、栄西に対する言及の仕方、五山派と同様に建仁寺や聖福寺と絡めたもので、彼らが中世段階では五山派の一員であった実態を裏づけている。ただし、先駆的な「千光国師」の用例がみえる『桃隠集』は、その後の近世禅宗が「臨済宗妙心寺派」の台頭で特色づけられること、その妙心寺派が主導した近世禅宗は、五山派主導の禅宗が国際性を特色としたのとは異なり、国内的な仏教の一派という性格を強くすること、などを想起させる。つまり、禅宗が国際性を失い国内仏教の一派派へと転じる過程で、「葉上」の尊称「僧正」に対抗すべく「千光」の尊称「国師」が打ち出されたのではないかと考えられるのである。

ちなみに、江戸期栄西研究の第一人者ともいえるべき建仁寺の学僧・高峰東峻は、確認できている限り、史料引用で「栄西僧正」等を用いつつも、自身では近世社会で一般化していた「栄西禅師」「千光国師」を用いず、「千光祖(師)」を用いたらしい(215、216)。五山派に受け継がれてきた「禅師」尊称回避傾向や、「国師」尊称の歴史的裏付けの乏しさなどを察していたとすれば、その見識は改めて注目に値しよう。

三、小括

以上、栄西の呼称について検討してきた。栄西の宗教的な呼称である「葉上」と「千光」はその使用者によって使い分けられてきた。「葉上」は廷臣・顕密寺社周辺が主に使用し、「千光」は禅宗周辺の記録文書類または宋元明人の文書類で主に使用される。江戸時代まで栄西の房号として、また台密の流派の一つ葉上流の始祖として関連深い「葉上」の呼称は、栄西存命中から広く国内で通用され、一方の「千光」は中国での呼称であったが、強い中国意識をもつ禅宗が国内に持ち込んだ呼称であり、国内においては「葉上」ほど主流ではなかった呼称と考えられる。また、「葉上」と「千光」には伴う尊称にも原則があり、「葉上」には「僧正」が、「千光」には「禅師」や「国師」が伴うことが明らかになった。さらに尊称にも時代的な傾向が見受けられ、「栄西僧正」という栄西の単純な名称に「僧正」の尊称が伴う呼称は中世史料の可能性が高く、「栄西禅師」の呼称は江戸時代を中心とした近世史料の可能性が高いことを指摘できる。この「栄西禅師」の呼称であるが、鶴岡八幡宮所蔵「堆朱箱底銘」(78)においても使用されている。この史料は、おそらく明人が記したのだが、納入先が顕密寺社であったため「千光」の呼称を避ける要望があったことが十分想定でき、この「千光」を避ける事例が、『山家学則』(37)にも同様に見られることをさきに触れた。近世においても主に顕密寺社周辺にとって「千光」の呼称は避けるべきものであり、栄西を天台僧的な宗教性をもった僧としての認識が未だ根強いことが考えられる。一方、主に「千光」の名称を用いた禅宗周辺は、顕密寺社周辺ほど強く避けていたわけではなく柔軟に「葉上」の名称を使用していた例が見受けられる。この柔軟性が禅宗の栄西への認識の特徴といえる。近世においては、禅宗的な認識が一般層に浸透をみせていく。地誌『石城志』(197)を例にすると、「葉上僧上 栄西禅師の事也、千光国師と諡す」と栄西を記している。「葉上僧上」と「千光国師」といった呼称が併記されており、栄西への認識に変化が生じていることは明らかである。一般的であった「葉上」

の呼称に「千光」の呼称が比肩するほどとなり、言い換えれば禪宗的な榮西認識が濃くなっているといえよう。また、この「千光」の呼称であるが、近世においては「国師」の尊称をもって呼称されることが多い。先述にあるが、この「千光国師」の呼称は、主に十五世紀半ばあたりから一般に呼称され出すもので、同じ国師号をもつ禪宗祖師達と同じように榮西が「国師」として認識されていることがわかる。つまり、少なくとも禪宗内において榮西への認識の変化、地位向上を図る動きがあったことが十分想定できる。榮西に「千光国師」の号が与えられたことを示す史料は現在、数量的に限られており、記述量の少なさからも事実に裏付けを取るにはやや物足りない。しかしながら、榮西に国師号が与えられたことを記す史料の成立年代が十五世紀以降であることを考慮すると、この頃から「千光国師」としての榮西認識が広まっていくことがわかる。

では、なぜ「千光国師」の呼称が広がりを見せていくのか。それは、「葉上僧正」に匹敵する榮西の呼称・認識を求め、禪宗を国内的な仏教一派に転換しようとする変化があったためと考えられる。そのために禪宗は、「葉上」としても「千光」としても榮西を評価し、利用しようとしたのではないか。その最たる例として、少なくとも十五世紀以降に成立したと考えられる「興禪護国論 序」(209)がある。この史料は、伝記形式であるが他の榮西伝記には見られない記述がいくつかあり、事実に信憑性の薄い箇所がある。しかしながら、この史料の興味深い点は、榮西に「葉上」の呼称がどのようにして与えられたか、その由来を記す点にある。「千光」の呼称の由来は、この史料を含め『聖福(弾) 寺仏殿記』(71)などいくつかの史料で見られるが、「葉上」の呼称の由来が確認できるのはこの史料にある説のみであり、さらにこの史料は顕密寺社周辺の性格をもった史料でなく、禪宗の僧侶によって書かれたものである。つまり、禪宗は顕密色の強い「葉上」としての榮西を踏まえながら「千光」としての榮西を評価していたことがわかる。また、文龜元年(一五〇二)に禪僧常庵龍宗が著述した『角虎道人文集』所収の「呈考叔書」(163)には、「緇家者則曰、千光日本小達磨也、雖非厥祖、孰非有本而報乎、白家者則曰、千光扶桑之一国師也、雖非厥義、孰非有信而帰乎」とある。宗教者は榮西を「小達磨」、世俗層は榮西を「国師」として認識していることがわかる。禪宗の榮西を国師とする認識が世俗層に広まっていることがわかるとともに、世俗層はその認識をもって榮西を評価している。この時期においては、世俗層において宗教または仏教が身近なものに変化していく。臨濟禪宗における代表者としての榮西は世俗層にその「国師」の尊称をもって評価される存在に変化したことが想定できる。その

変化の動きには、国内で未だ主流な認識であった「葉上」に「千光」を匹敵させるために「国師」の尊称を求めつつも、時には「葉上」を活用する禪宗の柔軟な対応があったことが考えられる。そして榮西は、禪宗にとつての代表者たりうる箔と実績をもった人物として評価され、その地位を確立させていくとみることができよう。

結果として、榮西への「国師」としての認識は浸透し、江戸期には「千光国師」という禪宗系の呼称と「葉上僧正」という顕密系の呼称が併記されるようになる。そして、臨濟宗祖、茶祖等の象徴的な地位を確立させていくが、その地位の向上、民衆的な存在へとも変容し出すのは十五世紀後半から十六世紀初期あたりと考えられ、榮西認識の大きな転換期ととらえることができるのではないかと考えられる。

おわりに

最後に、本稿から得られる研究展望をまとめてみたい。

第一に、榮西が禪宗ないし臨濟宗の祖師だとみなされるようになったのは、他宗派の祖師たちよりも遅れて、おおよそ江戸中期になってからだという特質をどう考えるか、という問題である。建仁寺高峰東峻の榮西研究が、今日にいたる榮西理解の直接的な出発点であることは、五山文学や禪宗史研究の分野で解明されてきた事柄だが¹⁶⁾、本稿ならではの提案は、こうした近世の榮西研究の進展に先立って、禪宗が国際色を失い国内仏教の一宗派に転じるという過程が存在したのではないかと、という見通しである。根拠は、従来有力であった「葉上僧正」に対抗すべく編み出された「千光国師」という呼称の台頭である。

「国際的」な千光の呼称に国師という「国内的」な事情で機能していた尊称を付加するというのは、中世末までほとんどみられない組み合わせだが、その後には、近世にいたり国内仏教として生き残ることを選択し、天皇との関係で顕密仏教・僧正に並ぼうとした禪宗・国師の自己主張を見て取ることができているのではないかと、このような見通しに即してどのような史料が新たに視野に入ってくるかが、今後問われている事柄であろう。

第二に、千光という国際的な禪宗系の呼称に対する廷臣・顕密寺社周辺のかたくなともみえる忌避の傾向をどう考えるか、という問題である。史料の収集作業の継続により、今後、廷臣・顕密寺社周辺で千光の用例が見出される可能性もあるが、当面は、次のような見通しをもって、引き続き史料探索を進めたい。すなわち、廷臣・顕密寺社周辺における「葉上」呼称の堅持と「千光」呼

称の忌避は、新興の禪宗に対する顕密仏教の全体性、優位性、ひるがえって禪宗の部分性、劣位性の現れであり、ゆえに顕密系は禪宗系呼称を採用しなかった、ということではなく、禪宗とは異なる栄西像の維持再生産に向けての努力の現れ、いかなれば、顕密仏教の宗派化の努力の現れではなかったか、という見通しである。中世後期における新しい宗派の形成といえ、浄土宗、浄土真宗、曹洞宗、日蓮宗、時宗など、いわゆる新仏教に目が向きがちである。しかしながら、中世前期の仏教界を主導した顕密仏教の中核部分は、中世後期において、いつ、どのようにして、天台宗、真言宗と呼ばれるような宗派に転化し定着したのか、あるいはこうした見取り図自体が妥当なのかどうか。本稿での「祖師」呼称の検討という方法が、このような課題に具体的にとりくむうえでも、ひとつに手掛かりなるのではないかと提起しておきたい。

〔注〕

(1) 主に以下の著書、論文、図録等を参照した(刊行年月順)。

- 多賀宗集『栄西』(吉川弘文館、一九六五年)
 柳田聖山『栄西と『興禅護国論』の課題』(『中世禅家の思想』日本思想体系一六、岩波書店、一九七二年所収)
 黒田俊雄「中世における顕密体制の展開」(『黒田俊雄著作集』第二卷、法蔵館、一九九四年、初出一九七五年)
 永村眞「東大寺大勧進職と『禅律僧』」(『南都仏教』四七、一九八一年)
 水野恭一郎「栄西と日宋交流」(『武家社会の歴史像』国書刊行会、一九八三年)
 平野宗浄・加藤正俊編『栄西禅師と臨済宗』(吉川弘文館、一九八五年)
 葉貫磨哉「中世禅林成立史の研究」(吉川弘文館、一九九三年)
 中尾良信「日本禅宗の伝説と歴史」(吉川弘文館、二〇〇五年)
 大塚紀弘「中世禅律仏教論」(山川出版社、二〇〇九年)
 栄西展と中世博多展実行委員会(福岡市博物館) 編集・発行『栄西と中世博多展』(展覧会図録、二〇一〇年)
 西尾賢隆①「中世禅僧の墨蹟と日中交流」(吉川弘文館、二〇一一年二月)
 西尾賢隆②「中世後期の禅宗—五山派から関山派へ—」(『臨済宗妙心寺派教学研究紀要』九、二〇一一年五月)
 久野修義『重源と栄西』(山川出版社、二〇一一年一月)
 岡山県立博物館編集・発行『栄西』(展覧会図録、二〇一三年三月二九日)
 『栄西集』(中世禅籍叢刊、臨川書店、二〇一三年三月三十一日)

藤田琢司「江戸時代における栄西研究—『興禅護国論』と高峰東峻—」(『禅文化』二二二、二〇一四年)

- (2) 柳田前掲注(1) 論文、四四〇頁。
 (3) 松尾剛次「新版鎌倉新仏教の成立—入門儀礼と祖師神話—」(吉川弘文館、一九九八年) 二六五頁参照。
 (4) 齋藤夏来「中世後期五山派の栄西認識」(公表準備中) を参照。
 (5) 多賀前掲注(1) 書、二〇〇頁。
 (6) 『中世禅家の思想』(前掲注1) 五五、一一一頁。
 (7) 大雑把に、中国や日本内部に通用した、という意味で、以下に用いる。
 (8) 『訓読 元亨釈書』上巻(禅文化研究所、二〇一一年) 一三五頁。
 (9) 菊池大樹「鎌倉仏教への道—実践と修学・信心の系譜—」(講談社、二〇一一年) 七〇頁。なお、矢野立子「中世禅僧と勅号—禅師号と国師号をめぐって—」(『史冊』四八、二〇〇七年) 四〇五頁も参照。
 (10) 『沙石集』下巻(岩波文庫版、一九四三年、一六一頁)。
 (11) 『訓読 元亨釈書』上巻(前掲注8) 一五二頁、永正二年奥書「諸宗勅号記」(『続群書類従』二八下、四〇八頁)。
 (12) 矢野立子「中世勅号の基礎的研究—国師号を通して—」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』一三、二〇〇七年)。
 (13) 水野前掲注(1) 論文、一四三頁。
 (14) 齋藤前掲注(4) 論文参照。
 (15) 『大日本史料』はおそらくすべて和学講談所本によるが、四一三、六九〇頁、五一三、六六七頁は「千光祖師」、五一二、三七七頁は「千光禅師」と翻刻されており、原本確認を要する。
 (16) 矢野前掲注(12) 論文。
 (17) 齋藤夏来「禅宗官寺制度の研究」(吉川弘文館、二〇〇三年) 第四章。
 (18) 住吉朋彦「高峰東峻の学績」(『文学 特集Ⅱ五山文学』一二巻五号、二〇一一年)、藤田前掲注(1) 論文など参照。

【付記】

本稿は、谷鋪昌吾が二〇一五年二月に岡山大学教育学部に提出した卒業論文「栄西認識の確立とその変遷」を改稿したものである。「はじめに」「おわりに」は齋藤執筆、「三 小括」は谷鋪執筆、「一 栄西認識を示す史料群の傾向」「二 栄西認識を示す呼称群の傾向」と表1、2は、谷鋪、齋藤の共同執筆・作成である。

栄西呼称の変遷と禅宗の変質

表1 栄西の呼称・尊称にかかわる史料一覧

分類	No.	史料名	年月等	西暦	出典等	薬上	僧正	千光	明庵	禅師	国師
I ①	1	孤雲懐奘撰『正法眼藏随聞記』	嘉禎期(1235~1238)成立	1238年頃	4-13p677、678、701、748 中尾2005p153	○	○				
	2	道元『宝慶記』	(建長5年8月以前)	1253年	岩波文庫版p4			○		○	
	3	「明庵千光禅師前権僧正法印大和尚忌辰上堂」(道元述『永平元禅師語録』所収)	(建長5年8月以前)	1253年	4-13p720		○	○	○	○	
	4	「千光禅師前権僧正法印大和尚位忌辰上堂」(道元述『永平広録』所収)	(建長5年8月以前)	1253年	4-13p720		○	○		○	
	5	道元述『正法眼藏』弁道話	(建長5年8月以前)	1253年	5-1p796						
I ②	6	慈円『愚管抄』	承久2年頃	1220年頃	4-12p554	○	○				
	7	無住道暁著『沙石集』	弘安6年成立	1283年	4-7p679、4-13p677	○	○				
	8	良忠著『往生要集義記』	(弘安10年7月以前)	1287年	1-23p140						
	9	無住道暁著『雑談集』	嘉元3年成立	1305年	4-13p676、730						
	10	虎関師錬著『元亨釈書』	元亨2年成立	1322年	訓読元亨釈書上巻(禅文化研究所、2011年)p28~		○				
	11	夢窓疎石『夢中問答集』巻中	康永3年開版	1344年	講談社学術文庫版 p165						
I ③	12	虎関師錬『紙衣騰』	(貞和2年7月以前)	1346年	藤田2014p33	○	○				
	13	伊藤東涯著『盃簪餘録』上巻	(元文元年以前)	1736年	4-13p759						
	14	百井塘雨著『笈埃随筆』	(寛政6年以前)	1794年	4-4p391、4-13p759			○			○
	15	松浦静山著『甲子夜話』	天保12年未完	1841年	4-13p751			○		○	
II ①	16	田内梅軒米三郎著『陶器考』	嘉永7年成立	1854年	5-4p369						
	17	「東寺天台大血脈図」(東福寺所蔵)	(宝治1年9月以前)	1247年	4-13p683、5-22p378						
	18	「菩薩戒血脈」	文永5年9月14日	1268年	5-22p383						
	19	「伝法用心」(南溪蔵本)	(康永4年奥書=青蓮院吉水蔵本)	1345年	5-22p423	○	○				
	20	「師資相承」坤	(成立年代未詳)		4-13p687						
	21	「禅教派脈図」(承天寺所蔵)	(成立年代未詳、近世)		5-22p441					○	
	22	「師資相承」坤	(成立年代未詳)		5-22p451						
II ②	23	皇慶撰『金剛界大灌頂随要私記』(京都妙法院蔵本)	承安3年5月写本	1173年	多賀1965p27、 水野1983p128、 平野・加藤1985p44	○					
	24	長西編『浄土依憑経論章疏目録』(長西録)	建暦期頃	1213年頃	4-13p704						
	25	「西大寺木造釈迦如来立像像内納入文書」	(建長1年5月か)	1249年	5-30p145,250						
	26	「仏説如意虚空蔵菩薩陀羅尼經」	文永10年奥書(永和2年重板)	1273年	4-13p690、6-48p167		○				
	27	承澄著『阿婆縛抄』	文永12年	1275年	平野・加藤1985p57	○	○				
	28	「聖一国師印信」(京都東福寺栗棘庵所蔵・重文)	弘安3年成立	1280年	5-22p392、401・405		○				
	29	「伊勢安養寺所蔵印信」	元応1年成立	1319年	5-22p409、411、417、418		○				
	30	「大山寺縁起巻」	(鎌倉後期成立か)	1333年	西尾2011② p24						
	31	叡山黒谷・光宗著『溪嵐拾葉集』	(貞和4年以前)	1348年	平野・加藤1985p67	○	○				
	32	「慈妙印信(金灌頂許可印信)」(密蔵院文書)	観応1年4月8日	1350年	愛知県史資料編8 p762No1267 (巻頭図版21)						
	33	尊円編『門葉記』	(延文1年以前)	1356年	4-12p328	○					
	34	「一心戒儀規(一心戒儀軌)」	応永20年2月27日	1413年	平野・加藤1985p34、p140 注2、p434	○					
	35	「長楽寺所蔵記録」	応永25年3月か	1418年	7-32p165	○					
	36	慶弁筆『印信目録』	永正5年成立か	1508年	5-22p461、468、469、 473	○					
	37	敬光述・仏観補『山家学則』	安永5年自序	1776年	5-22p452	○	○				○
38	覚千著『自在金剛集』(天台)	寛政3年序	1791年	5-22p453	○						
III ①	39	「山門穴太流受法次第」	(成立時期未詳)		多賀1965p26	○					
	40	「日吉山王利生記」	(成立時期未詳)		久野2011p35	○	○				
	41	「悲想伝授抄」(金沢文庫所蔵)	(成立時期未詳)		中尾2005p65、88	○	○				
	42	「蓮華院流血脈写」(下総徳星寺所蔵)	(成立年代未詳)		5-22p376	○	○				
	43	葉上流灌室(愛知県春日井市密蔵院現存)	(成立時期未詳)		多賀1965p210	○					
	44	著編者未詳『書写山長史記』	(成立年代未詳、近世)		4-13p761	○	○				
	45	「百練抄」	建久5年7月5日条	1196年	4-4p610、4-13p692						
	46	宣旨写(高峰東叟撰『壺松一枝』所収)	建永1年10月11日	1206年	永村1981p67						
	47	「仲資王記」	承元1年7月28日条	1207年	4-9p760、4-13p672	○					
	48	「業資王記」	建暦2年1月15日条	1212年	4-11p455、4-13p671	○					
	49	「明月記」	建保1年(建暦3年)4月29日条	1213年	4-12p466	○					
	50	「明月記」	建保1年5月3日条	1213年	4-12p554		○				
	51	「仁和寺日記」	建保1年5月4日条	1213年	4-12p554、4-13p671		○				

	52	「太政官符」(高峰東峻撰『靈松一枝』所収)	建保3年10月15日	1215年	永村1981p67		○				
	53	「將軍家御教書写」(金剛三昧院住持次第)	天福2年10月	1234年	高野山文書刊行会版2 No.379		○				
	54	「戒壇院定置」	(13世紀末頃か)	1300年頃	永村1981p94		○				
	55	「東大寺図書館所蔵文書」4-29	(13世紀末頃か)	1300年頃	永村1981p77		○				
	56	「天龍寺供養山門噺訴一件(康永四年山門申状、山門訴申)」	康永4年7~8月	1345年	4-7p678、6-9p130、200						
	57	一条経嗣著「相国寺塔供養記」	応永6年	1399年	7-4p48		○	○			
III②	58	「附宮辻子地于靈洞庵文」(『靈洞雜記』所収)	延文2年6月18日	1357年	6-21p312			○		○	
	59	『空華日用工夫略集』	応安3年2月26日条	1370年	4-13p682、6-33p343			○			
	60	『空華日用工夫略集』『空華日用工夫集別抄』	応安7年10月8日条	1374年	6-42p95			○			
	61	『空華日工集』卷三	(嘉慶2年4月以前)	1388年	4-7p677、4-13p705			○			
	62	『碧山日録』	寛正1年4月9日条	1460年	5-1p810				○		
	63	『蔗軒日録』	文明18年3月15日条	1486年	4-13p29						
	64	「耳峰玄熊極書采西申状」(博多聖福寺文書)	永祿13年3月	1570年	福岡市博2010 p112No.84			○			
	65	『鹿苑日録』	天正20年7月20日条	1592年	続群書類従完成会版3 p74			○			○
	66	「正治元年11月8日付明全戒牒追記」(永平寺文書)	(年紀未詳、中世)		5-1p856			○			
IV	67	「栄西禪師帰朝宋人送別書画之幅添書」(『送海東上人帰国図』常磐山文庫所蔵)	北宋・紹熙5年か	1194年	4-13p759						○
	68	楼揆撰「太白山千仏閣記」(『京都府寺誌稿』所収)	北宋・慶元4年成立	1198年	4-13p672、多賀1965p77				○		
	69	虞楞撰「日本国千光法師祠堂記」(『禅林僧伝』所収)	南宋・宝慶1~2年頃か	1226年頃	続群書類従9上 p273			○	○		
	70	「大用以令書」(『黄龍十世録』所収)	元・至治1年	1321年	新集3p207			○		○	
	71	河南陸仁著「聖福禪寺仏殿記」(『鄰交徴書』所収)	正平23年2月7日	1368年	4-13p675、6-28p713			○	○		
	72	趙秩著「偶作詩并序」(『雲門一曲』所収)	明・洪武7年3月	1374年	6-40p328			○			
	73	季潭宗泐著「日本国建長寺明禪師語録叙」(『円通大応国師語録』所収)	明・洪武8年5月19日	1375年	6-45p230			○		○	
	74	「宋文憲公全集」(『宋濂文集』)	(明・洪武14年以前)	1381年	6-40p92			○			
	75	季潭宗泐著「日本天龍禪寺開山夢窓正覚心宗普濟国師碑銘」(『空華日用工夫略集』所収)	明・洪武16年2月	1383年	6-46p192			○		○	
	76	加蘭(如蘭カ)筆「洛城東山建仁禪寺開山始祖明庵西公禪師塔銘」	明・永楽2年	1404年	続群書類従9上 p274			○	○	○	
	77	明開性道等撰「天童寺志」	(明・崇禎17年以前か)	1644年	4-1p891.892			○			
	78	「堆朱箱底銘」(鎌倉市・鶴岡八幡宮所蔵)	(成立年代未詳、近世)		多賀1965p85 (写真版あり)						○
V	79	「開山千光和尚」(贊、『大覚禪師語録』所収)	(弘安1年以前)	1278年	4-13p716			○			
	80	「開山千光和尚忌上堂(建仁寺入院院法語、『大覚禪師語録』所収)	(弘安1年以前)	1278年	4-13p720			○			
	81	「千光法師」(贊2点、『仏光国師語録』所収)	(弘安9年以前)	1286年	4-13p716			○			
	82	「讚寿福開山千光祖師」(贊、『仏源禪師語録』所収)	(正応2年11月以前)	1289年	4-13p716			○			
	83	「結制」(建仁寺入院院法語、『鏡堂録』所収)	(徳治1年9月)	1306年	新集6p465			○			
	84	「千光法師」(贊、『一山国師語録』所収)	(文保1年以前)	1317年	4-13p716			○			
	85	「鐵庵和尚住鎮西聖福諸山疏」(入寺疏、『秋澗泉和尚語録』中所収)	(元亨3年以前)	1323年	新集6p85			○			
	86	「明極和尚住建仁山門疏」(入寺疏、『乾峰和尚語録』所収)	建武3年4月	1336年	新集別1p440、年代は明極入院法語による			○			
	87	『大鑑禪師語録』	(暦応2年正月以前)	1339年	多賀1965p256		○	○			
	88	「千光法師贊」(贊、清拙正澄著、『千光・寂庵贊』所収)	(暦応2年正月以前)	1339年	4-13p717		○	○	○	○	
	89	「明蒙山住聖福山門疏」(入寺疏、『清拙和尚語録』所収)	(暦応2年正月以前)	1339年	6-27p399					○	
	90	「再住寿福禪寺語録」(寿福寺入院院法語、『東明和尚語録』所収)	(暦応3年10月以前)	1340年	新集別2p32				○		
	91	「蒙山和尚住建仁諸山疏」(入寺疏、『乾峰和尚語録』所収)	康永4年	1345年	新集別1p442、年代は史料綜覧による			○			
	92	「雪村和尚住建仁山門疏」(入寺疏、『乾峰和尚語録』所収)	康永4年	1345年	新集別1p443、年代は宝覚真空禪師録による			○			
	93	「蒙山和尚住建仁山門疏」(入寺疏、『乾峰和尚語録』所収)	康永4年	1345年	新集別1p442、年代は史料綜覧による			○			
	94	「江湖請石梁住聖福」(入寺疏、『宝覚真空禪師録』所収)	(貞和2年12月以前)	1346年	新集3p828			○			

栄西呼称の変遷と禅宗の変質

95	「龍山和尚住山城州東山建仁禪寺語録」(建仁寺入院法語、『黄龍十世録』所収)	観応1年8月	1350年	新集3p226				○			
96	「建仁開山千光祖師丈弘記」(記銘叙題、『東海一瀛集』所収)	文和2年10月	1353年	4-13p723、6-38 p47、6-43p27				○			
97	「千光祖師聖像讃」(贊、放牛光林著、『法観雜記』所収)	文和2年12月16日	1353年	4-13p717、6-38p44				○			
98	「偈寄千光法師」(寄文送行次韻、『黄龍十世録』所収)	(延文3年以前)	1358年	4-13p715				○			
99	「日本国京師東山建仁千光禪師榮西」(記銘叙題、『黄龍十世録』所収)	(延文3年11月以前)	1358年	新集3p210				○	○	○	
100	「南嶺子越住聖福寺諸山疏」(入寺疏、長門東隆寺所藏)	(延文4年8月)	1359年	西尾2011① p86				○			
101	「開山千光禪師忌拈香」(聖福寺入院法語、『月堂宗規語録』所収)	(康安1年9月以前)	1361年	大徳寺禪語録集成1p196				○		○	
102	「礼聖福開山千光禪師塔」(記銘叙題、『月堂宗規語録』所収)	(康安1年9月以前)	1361年	大徳寺禪語録集成1p197				○		○	
103	「千光祖師忌」(仏事法語、『中巖和尚語録』所収)	康安2年	1362年	新集4p729				○			
104	「蒙山和尚住建仁山門疏」(入寺疏、『広智国師語録』所収)	(康安1年12月以前)	1362年	6-8p564				○			
105	「丙午冬覽出海雲游京師有作」(寄文送行次韻、『空華集』所収)	貞治5年冬	1366年	6-43p79				○			
106	「寄中巖和尚再住建仁」(寄文送行次韻、『閻浮集』所収)	(貞治5年9月以前)	1366年	6-43p45				○			
107	「洞春菴別源禪師定光塔銘」(記銘叙題、『東海一瀛別集』所収)	応安4年夏	1371年	6-26p312				○			
108	「仏牙舍利記」(記銘叙題、『鹿王院文書』)	応安7年1月	1374年	6-40p76				○			
109	「草堂和尚住龜谷山寿福禪寺語録」(寿福寺入院法語、『方法語』所収)	応安7年6月9日	1374年	6-41p15				○			
110	「天祥和尚初住薩州路黄龍山大願禪寺語録」(大願寺入院法語、『天祥和尚録』所収)	永和5年2月	1379年	新集別2p240				○			
111	「據室」(聖福寺入院法語、『天祥和尚録』所収)	康暦1年6月	1379年	新集別2p243							
112	「開山千光祖師忌拈香」(聖福寺入院法語、『天祥和尚録』所収)	康暦1年6月	1379年	新集別2p245				○			
113	「無等以倫誌序」(『黄龍十世録』所収)	康暦2年11月	1380年	新集3p195				○			
114	「修千光祖師入定塔」(寄文送行次韻、『無規矩』所収)	(永徳1年11月以前)	1381年	4-13p725				○			
115	「題建仁開山千光禪師塔松」(記銘叙題、『鏡堂録』所収)	(永徳1年11月以前)	1381年	4-13p725				○		○	
116	「大願麟天祥住聖福諸山」(入寺疏、『汝霖佐禪師疏』所収)	(至徳3年頃)	1386年	新集別2p550				○			
117	「三聖頂五峯住聖福京諸山」(入寺疏、『汝霖佐禪師疏』所収)	(至徳期)	1386年頃	新集別2p527				○			
118	「一夢庵住聖福諸山」(入寺疏、『汝霖佐禪師疏』所収)	(至徳期)	1386年頃	新集別2p549				○			
119	「十朋嘉会詩叙」(記銘叙題、『空華集』所収)	(嘉慶2年4月以前)	1388年	4-6p522、6-38p47				○			
120	「賀林放牛遷住天龍」(寄文送行次韻、『空華集』所収)	(嘉慶2年4月以前)	1388年	6-38p40				○			
121	「播州清水寺重建宝塔化縁疏」(勸縁疏、『空華集』所収)	(嘉慶2年4月以前)	1388年	4-13p676				○			
122	「東山建仁禪寺語録」(建仁寺入院法語、『天祥和尚録』所収)	応永1年10月	1394年	新集別2p263				○			
123	「提綱」(京万寿寺入院法語、『天祥和尚録』所収)	(応永14年12月以前)	1407年	新集別2p251				○			
124	「宗堂和尚肖像」(贊、『天祥和尚録』所収)	(応永14年12月以前)	1407年	新集別2p356				○			
125	「濃州天池海宗和尚」(寄文送行次韻、『天祥和尚録(龍涎集)』所収)	(応永14年12月以前)	1407年	新集別2p381、 7-7p357				○			
126	「開山祖師拈香」(建仁寺入院法語、『天祥和尚録』所収)	(応永14年12月以前)	1407年	新集別2p296				○			
127	「奉謝征夷大將軍使起宗和尚住聖福刹」(寄文送行次韻、『天祥和尚録』所収)	(応永14年12月以前)	1407年	新集別2p377				○			
128	「東山建仁寺語録」(建仁寺入院法語、『仲方和尚語録』所収)	応永16年3月	1409年	7-11p362							
129	「冬至小參」(建仁寺入院法語、『繫驢概』所収)	応永17年8月	1410年	新集別2p584				○			
130	「太白和尚」(贊、『東海橋華集』所収)	応永28年11月	1421年	7-22p322				○			
131	「次韻千光祖師諱日」(寄文次韻、『繫驢概』所収)	(永享1年9月以前)	1429年	新集別2p635				○			
132	「一清隱住聖福諸山疏」(入寺疏、『惟肖巖禪師疏』所収)	(永享9年4月以前)	1437年	新集2p1113				○			

133	「亀谷山寿禪寺藏經勸縁疏」(勸縁疏、 『惟肖巖禪師疏』所収)	(永享9年4月以前)	1437年	新集2p1197				○		
134	江西和尚住瑞龍山太平興國南禪寺語 録(南禪寺入院法語、『江西和尚語録』 所収)	嘉吉1年8月	1441年	新集別1p6				○		
135	「三月望上堂」(建仁寺入院法語、『心 田和尚録』所収)	嘉吉2年3月	1442年	新集別1p844				○		
136	「瑞岩住建仁」(入寺疏、『統翠稿』所収)	文安3年2月	1446年	新集別1p169、年代は瑞 巖和尚語録による					○	
137	「惟忠住建仁」(入寺疏、『統翠稿』所収)	(文安3年8月以前)	1446年	新集別1p77				○		
138	「文林住建仁」(入寺疏、『統翠稿』所収)	(正長1年)	1446年	新集別1p166				○		
139	「惺瑞岩住建仁」(入寺疏、『心田播禪 師疏』所収)	(文安4年以前)	1447年	新集別1p782						
140	「惺瑞岩住筑之聖福有序」(入寺疏、『越 雪集』所収)	(文安・宝徳頃)	1450年頃	新集別2p152				○		
141	「送南叟湖上人遊明国」(寄文送行次韻、 『村庵藁』所収)	宝徳3年	1451年	新集2p228				○		
142	「景南和尚語録附録法観寺一件」	(享徳3年以前か)	1454年	6-38p37				○		
143	「前南禪瑞岩禪師行遺記」(記銘叙題、 『秃尾長若帯』所収)	長祿4年12月	1460年	新集4p33、36				○		
144	「賛千光国師」(賛、『桃隠集』所収)	(寛正2年以前)	1461年	妙心寺派語録1p23				○		○
145	「送九淵西堂赴大唐国序」(寄文送行 次韻、『流水集』所収)	(寛正3年1月以前)	1462年	新集3p439				○		
146	「夏木黄鸝」(寄文送行次韻、『九淵遺 稿』所収)	(文明6年3月以前)	1474年	新集別2p410				○		
147	「送天龍寺用林材公禪師赴大明国序」 (寄文送行次韻、『天隱和尚文集』所収)	文明8年春	1476年	新集5p981				○		
148	「正宗住聖福江湖疏」(入寺疏、『補庵 京華統集』所収)	文明12年春	1480年	新集1p405				○		
149	「正宗和尚住東山建仁禪寺語録」(建 仁寺入院法語、『秃尾鐵若帯』所収)	文明12年8月	1480年	新集4p153、155、172				○		
150	「開山忌拈香」(建仁寺入院法語、『秃 尾鐵若帯』所収)	文明15年3月	1483年	新集4p180				○		
151	「二十有四日丙申」(記銘叙題、『梅花 無尽藏』所収)	文明18年10月	1486年	新集6p715				○		○
152	「正宗住建仁諸山」(入寺疏、『蕉庵遺 藁』所収)	(長享1年8月以前)	1487年	新集6p276					○	
153	「春湖鑑首座住備前成道友社疏」(入 寺疏、『蕉庵遺藁』所収)	文明15年8月	1487年	新集6p281				○		
154	「際九淵住建仁江湖疏」(入寺疏、『村 庵藁』所収)	(長享2年6月以前)	1488年	新集2p431				○		
155	「志林字説」(字説、『村庵藁』所収)	(長享2年6月以前)	1488年	新集2p450				○		
156	「前南禪一庵大禪師像」(賛、『秃尾鐵 若帯』所収)	(明応7年正月以前)	1498年	7-9p368				○		
157	「玉林字説」(字説、『秃尾長若帯』所収)	(明応7年正月以前)	1498年	新集4p83						
158	「聖福龍門菴先天寿座元寿像」(賛、『秃 尾鐵若帯』所収)	(明応7年正月以前)	1498年	新集4p147				○		
159	「翌日開山塔拈香」(建仁寺入院法語、 『翠竹真如集』所収)	(明応9年9月以前)	1500年	新集5p707				○		
160	「結座」(建仁寺入院法語、『翠竹真 如集』所収)	(明応9年9月以前)	1500年	新集5p728				○		
161	「前住南禪秋柏大和尚寿像讚」(賛、『翠 竹真如集』所収)	(明応9年9月以前)	1500年	新集5p874				○		
162	「建仁寺翻蓋弘慶化疏并序」(勸縁疏、 『黙雲集』所収)	(明応9年9月以前)	1500年	新集5p1078				○		
163	「呈考叔書」(寄文送行次韻、『角虎道 人文集』所収)	文亀1年6月	1501年	続群書類従13上 p455				○		○
164	「前霜台英林居士三十三年忌陞座」(仏 事法語、『月舟録』所収)	(永正10年か)	1513年	4-13p691				○		
165	「建仁開山祖師三百年忌辰化育疏」(勸 縁疏、『幻雲疏藁』所収)	永正11年3月5日	1514年	4-13p721	○	○	○			
166	「建長寺西來庵修造勸進状」(勸縁疏、 『浄智寺文書』275)	永正12年7月	1515年	鎌倉市史史料編3p296				○		○
167	「前住建長南陽禪師寿容」(賛、『翰林 葫蘆集』所収)	永正12年	1515年	五山文学全集4p545						
168	「瑠弟夢拜千光大士記」(記銘叙題、『月 舟録』所収)	大永4年4月	1524年	4-13p730				○		
169	「除夕小參」(建仁寺入院法語、『月 舟和尚語録』所収)	(天文2年以前)	1533年	6-40p131				○		
170	「六月旦上堂」(建仁寺入院法語、『月 舟録』所収)	(天文2年以前)	1533年	4-13p691	○	○	○			
171	「千光国師像賛」(賛、『鏤水集』地所収)	永祿5年9月	1562年	4-13p675				○		○
172	「退耕行勇像賛」(賛、『高野山文書』 2-352)	寛永19年	1642年	高野山文書刊行会版				○		

栄西呼称の変遷と禅宗の変質

	173	「於龜谷山寿福寺千光祖塔」(仏事法語、『三江和尚語録』所収)	(寛永～正保期頃)	1648年頃	東大史料謄写本36丁ウ				○			
	174	「扶桑仏心宗第一千光祖忌」(仏事法語、『三江和尚語録』所収)	(寛永～正保期頃)	1648年頃	東大史料謄写本38丁ウ				○			
	175	「翌日開山塔拈香」(建仁寺入住院法語、『顕令和尚住東山建仁禪寺語録』所収)	万治3年10月25日	1660年	4-13p724							
	176	「上梁」(建仁寺入住院法語、『顕令和尚住東山建仁禪寺語録』所収)	寛文3年10月	1663年	4-13p725							
	177	「開山祖師開光明安座」(建仁寺入住院法語、『顕令和尚住東山建仁禪寺語録』所収)	寛文4年2月10日	1664年	4-13p728				○			
	178	「雲州瑞塔山天長雲樹聖禪寺開山兩朝特賜国濟三光国師碑銘」(記銘叙題、無著道忠撰「雲樹寺開山三光国師碑銘」所収)	正徳2年8月	1712年	6-23p570				○			
	179	「昭堂上棟銘」(記銘叙題、『京都府寺志稿』所収)	明治17年	1884年	4-13p727							
VI①	180	信瑞著「泉涌寺不可棄法師伝」	寛元2年成立	1243年	4-13p681、5-3p716				○			
	181	道光著「鎌倉佐介浄利光明寺開山御伝」	弘安10年成立	1287年	5-22p484							
	182	凝念撰「東大寺円照上人行状」	正安4年成立	1302年	永村1981p85、水野1983p167				○			
	183	伝喜海撰「明恵上人伝記」	(鎌倉末写本あり)	1333年頃	4-13p680、762、5-7p504、507、610				○	○		
	184	龍泉令淬編「虎関和尚紀年録」	(貞治4年12月以前)	1365年	6-9p1012						○	
	185	「建斯記」	(室町中期か)	1450年頃	5-1p856				○			
	186	「円明国師縁起」(無本覚心伝記)	(永正14年古写本あり)	1517年	4-13p730			○	○			
	187	自南聖薫編「法灯円明国師行実年譜」	(永正14年頃か)	1517年	5-4p153、5-13p665			○	○	○		
	188	徳稽有隣著「紀州由良鷲峯山法灯円明国師之縁起」	永正14年	1517年	5-4p154			○	○			
	189	亨庵宗元撰か「水上山万寿開山神子禪師行実」	(成立年代未詳)		4-13p692、5-22p481				○			
	190	亨庵宗元編「栄尊年譜」貞治2年条	(成立年代未詳)		葉貫1993p181				○	○		
	191	亨庵宗元編「神子禪師年譜」	(成立年代未詳)		5-22p482				○	○		
	192	著編者未詳「柏葉抄録」	(成立年代未詳、近世)		5-7p506						○	
VI②	193	西貞著「筑後地鑑」	天和2年自序	1682年	4-13p753				○			○
	194	河井恒久撰「新編鎌倉志」	貞享2年刊	1685年	4-13p748、749				○			○
	195	白慧著「山州名跡志」	元禄15年自序	1702年	4-7p681				○			○
	196	貝原益軒編著「筑前国統風土記」	元禄16年完成	1703年	4-3p654、656、4-13p749、752、753				○	○		○
	197	津田元願撰「石城志」	明和2年成立	1765年	4-13p750			○	○	○		○
	198	森本一端著「肥後国志略」	明和9年自序	1772年	6-38p311				○			○
	199	秋里離里著「都名所図会」	安永9年成立	1780年	水野1983p152							
	200	平山武毅著「薩藩名勝志」	文化3年成立	1806年	4-13p759			○	○	○		○
	201	植田孟普撰「鎌倉攬勝考」	文政12年成立	1829年	5-2p701							
	202	「紀伊国統風土記」(紀伊藩官撰地誌)	天保10年完成	1839年	5-2p126				○	○	○	○
	203	伊藤常足編「太宰管内志」	(天保12年以前)	1841年	4-3p656				○			○
	204	間宮土信等著「新編相模国風土記稿」	天保12年成立	1841年	4-6p522			○				
	205	南里居易著・糸山貞幹増補「肥前旧事」	万延2年増補	1861年	4-3p657、4-13p753						○	
	206	編著者未詳「上野国志」	(成立時期未詳、近世)		5-22p498				○			
VI③	207	「仏祖正伝宗派図」	永徳2年刊	1382年	5-13p666						○	
	208	古篆周印編「仏祖宗派綱要(仏祖宗派図)」	応永25年刊	1418年	4-13p689、5-22p377						○	
	209	著者未詳(南叟□朔か)「興禪護国論序」	宝徳期頃か	1452年	4-13p663			○	○	○		
	210	著編者未詳「和漢禪利次第」	(寛永3年写本あり)	1626年	4-7p681			○	○	○		○
	211	編者等未詳「本朝禪林宗派并五山十刹」	(江戸初期写本あり)	1650年頃	4-13p690、5-13p667、5-22p377				○	○	△	
	212	「千光祖師法衣由来」(『法観雜記』所収)	寛文4年3月5日	1664年	4-13p723				○			
	213	「禪門菩薩戒相承脈譜」(承天寺所蔵)	延宝7年6月	1679年	5-22p437						○	○
	214	聖僕義諦編「禪籍志」	正徳6年刊	1716年	4-13p708				○	○		○
	215	高峰東峻撰「靈松一枝」	(安永8年以前)	1779年	4-13p682、725、753、755				○	○		
	216	高峰東峻撰「千光祖師年譜」	(安永8年以前)	1779年	4-13p732			○	○			
	217	著編者未詳「興聖寺過去帳」(曹洞宗)	(成立年代未詳、近世)		4-13p757				○			○
	218	著編者未詳「龍宝山大徳寺誌」	(成立年代未詳、近世)		4-13p715						○	○
VI④	219	「吾妻鏡」	(嘉元期)	1306年頃	吾妻鏡・玉葉データベース(CD-ROM版)			○	○			
	220	伝永祐撰「帝王編年記(歴代編年集成)巻23」	(康暦2年頃以前成立)	1380年	4-7p677				○			
	221	著者未詳「立川寺年代記」	応仁1年頃成立	1467年頃	4-7p680				○			
	222	作者未詳「武家年代記」	(15世紀末以前成立)	1500年頃	4-13p652				○			○
	223	著編者未詳「鎌倉管領九代記」	寛文12年刊	1672年	7-2p183			○				

	224	伊達綱村編『伊達正統世次考』	元禄16年成立	1703年	仙台文庫叢書版一23丁オ (東大総所蔵)			○			
	225	著篇者未確認『皇代記』(複数あり)	(成立年代未確認)		4-3p653						
	226	著編者未詳『皇帝紀抄』	(成立年代未詳、鎌倉中期?)		4-12p554						
VI⑤	227	『播磨国増位寺集記』(播磨随願寺所蔵)	乾元1年成立か	1302年	4-4p103、4-13p682			○			
	228	『備前国金山観音寺縁起写』(金山寺文書52)	明応6年頃	1497年頃	岡山県古文書集2p25、岡山県博2013p35Na25(抜粋)	○	○				
	229	懐英著『高野春秋』	享保期頃成立	1736年頃	5-13p670			○			○
	230	泰円著『野山名霊集』	宝暦2年刊	1752年	4-13p757	○	○	○			○
	231	『備前国銘金山観音略縁起』(『吉備温故』所収)	(寛政期以前成立)	1801年	4-13p758	○	○				
	232	『興福寺年代記』	(成立年代未確認)		4-7p680						
	233	『天台霞標』第三編卷之四	(成立年代未確認、近世)		水野1983p155			○		○	
	234	著編者未詳『長楽寺記』(毛呂雪男氏所蔵)	(成立時期未詳、近世)		5-22p494					○	
	235	編者未詳『東大寺造立供養記』	(成立時期未詳)		4-3p653、4-13p679						
	236	著編者未詳『鶴岡八幡宮寺諸職次第』	(成立年代未詳、近世)		5-13p669	○	○	○			○
VI⑥	237	『草野系図』	(天保期頃か)	1841年	4-3p657			○			○
	238	飯田忠彦編か『系図纂要』	(安政4年頃成立)	1857年	5-34p37				○		
	239	著編者未詳『紀氏系図』	(成立年代未詳、近世)		4-13p683	○	○				
VI⑦	240	『太平記』	永和期成立か	1379年頃	6-9p136						
	241	『源平盛衰記』	(14世紀後半頃成立)	1380年頃	久野2011p3	○					
VI⑧	242	『雲葉和歌集』	文永2年成立	1265年	4-13p703		○				
	243	『海人藻芥』(有職故実書)	(応永27年記あり)	1420年	4-13p680	○	○				
	244	編者不詳『塵添壘囊鈔』(類書)	天文1年成立	1532年	4-3p653、4-13p652	○	○				
	245	京都府編『史料蒐集目録』	明治37年	1904年	7-7p103			○			
	246	著編者未詳『摺雲捉風』	(1833~1916年編?)	1916年	6-22p686			○			○

凡例

大日本史料第1編23巻45頁→1-23p45と表記

五山文学新集1巻23頁→新集1p23と表記

その他、個別著書、論文は注1を参照。